

「お試し」セットの信仰か、飛躍による単独者の信仰か—信仰の逆説を問う—

賭けによる神の存在証明

神の存在証明にはさまざまな種類があるが、なかでもパスカルの「賭けによる証明」はユニークなものだ。それは次のような論法である。「神は存在するか、それとも存在しないかのどちらかである。人が望むものは真理と至福であり、避けたいのは誤謬と悲惨である。神は真理であり、至福を与えてくれる。だとすれば、神が存在するほうに賭けるがよい。当たれば丸儲けになるだろう。万一ハズレであっても何も損をすることはない。それゆえ躊躇せず、神があるほうに賭けたまえ」(『パンセ』ブランシュヴィック版「断章 233」参照)。

しかし、この論法は、そのまま現実の宗教問題に適用できるものではない。なぜなら、賭けによる証明(賭博論的証明とも言う)は、あくまで無神論か有神論かという一般的な議論において有効なものだからである。しかし、本当の賭けがあるとすれば、一般論として神が存在するか否かということではなく、目の前にある〇〇教の主宰神が信仰するに値する神として存在するか否か、という問題であろう。こういう問題の立て方では、賭博論的証明は文字通り博打のような危険性が出てくるのである。ハズレであれば、文字通り人生を棒に振ることになってしまう。まさに危ない賭けである。これに較べれば、有神論か無神論かという一般的な神証明の議論など、実存的にはたいして意義はない。

「お試し」信仰とは

分かりやすいのは、〇〇教が目に見える形で有り難いご利益を提示してくれるか否か、という場合である。その昔、百済の聖明王が日本に使者を派遣して、欽明天皇に金銅仏を献呈し、仏教の信仰を勧めた。欽明天皇は、仏法を信じれば限りない福德果報が得られると聞いて^{かんぎゆやく}歡喜勇躍し、請来された金銅仏を見て「仏の^{か おきらざら}相貌端嚴し」と感嘆したという(『日本書紀』卷十九)。ただ、これを礼拝すべきか否かは自分では決めかねず、群臣に諮ったところ、賛成派(蘇我氏)と反対派(物部氏)に分かれてしまった。天皇はそこで、試みに賛成派の蘇我稲目に礼拝させてみたのである。その後、種々の歴史的顛末があるわけだが、結局のところ仏教が我が国に導入されたのは周知の通りである。

仏教は最先端の文明や技術を伴って入ってきた。どうしてこれを取り入れないなんてことがあり得ようか。仏教入信はまさに理に適ったことである。それでもやはり天皇は心配になって、家臣の一人に礼拝させてみた。信仰は大きな賭けなのである。本当に仏教を取り入れ、信仰して大丈夫なのかどうか、「お試し」を試してみたわけである。そのお試しセットが朝鮮半島伝来の文明や技術であった。

これは古代仏教だけの話ではない。21世紀の今日でも多くの宗教はこれと大同小異の仕方では人々を勧誘している。だが、その宗教が教え通りの真理と至福を本当にもたらしてくれるかは別問題。だからこそ、信仰は一度「お試し」してみないといけなわけだ。でも、果たしてそのようなものが宗教であると言えるのだろうか。

信仰に一般論はない

『旧約聖書』(創世記 22 章)の中に、アブラハムが息子のイサクを神に捧げるといふ物語がある。神の命じるまま、アブラハムはイサクを連れて山に登り、彼を神の生贄として捧げることになった。彼が刃物を振り上げ、息子を殺そうとするまさにその時、天から主の御使の声が聞こえた。その声は「独り子を捧げるほど、汝が神を恐れる者であることを我は知った」と語り、アブラハムの行為を押し止めた。そこで、彼は神の命令に

従い、雄羊を神のために捧げたのである。キルケゴールはこの物語を『おそれとおのき』(1843)で詳細に論じたが、同書の中で次のような挿話を挟んでいる。

一人の牧師が、この物語を説教の中で情熱的に説いた。アブラハムは最愛の独り子を神に犠牲として捧げるほど、神を愛していたのだ。これが彼の説教の眼目である。ある信者の男が熱心に聴いていた。男は深い感銘を受けて自宅に帰り、まさに我が息子に手を掛けようとした。異変に気付いた牧師がそこに駆けつけ、「息子を殺そうとするなんて、お前は悪魔に取りつかれたのか」と怒鳴り、必死になって男の行為を押し止めた。かくして恐ろしい殺人は未然に防がれ、牧師は大きな満足感を覚えたのだった。

アブラハムが行おうとしたことは、倫理的に表現すれば、イサクを殺すということであった。しかし、宗教的に表現するならば、イサクを神に捧げるといふことである。アブラハムは息子を愛してやまないからこそ、彼を神に捧げようとするのだが、彼は自らの企てを、当の息子にもまた妻にも語らない。語ることができないのである。なぜなら、そのような企ては人間的な意味で理解を絶したものであり、しかも他ならぬ神がアブラハムだけに課した試練だからである。信仰にはそもそも一般論はあり得ない。したがって一般論を信仰に持ち込んではいならないのである。

倫理は普遍的に誰にも適用できる。それゆえ悟性(通常の理解力)で十分悟ることができる。しかしここで問題とされるのは、悟性に対してどこまでも躰きを与える宗教である。倫理と宗教との間には底知れぬ深淵が口を開いている。悟性のほうから深淵を架橋することはできない。深淵は信仰によって飛び越えていくしかないのである。

「お試し」セット的信仰と単独者の信仰

我々はアブラハムではないし、アブラハムの真似はしてはならない。そんな所業をしでかそうものなら、人間の倫理がこれをまず差し止めに入るだろう。宗教的信仰がこの世の共同体の中で説かれる限り、限りなくそれは普遍的倫理に反しない形で教えられる。気になるようであれば、「お試し」してみてもよいのだ。「みなさん信仰している結構な教えですよ。あなたもひとつ信仰してみませんか。お試しセットには各種御利益取り揃えています。」信仰の基準はどこまでも人間的幸福であり、そこには何の逆説も存在しない。

けれども、アブラハムは違った。人間の倫理は目的論的停止を命じられる。彼は右顧左眈せず、絶対者たる神に信仰者として絶対的に従った。彼は他の誰にも代替できない個別者(単独者)den Enkelteとして行為した。信仰の逆説は、個別者が普遍的なものを超えるというところにある。この物語が我々の心胸を打つ理由もまさにそこにある。

宗教的信仰とは本来、他人から薦められて「お試し」するものではない。我々一人ひとりもまたアブラハムと同じく、普遍的なものに止揚されない個別者(単独者)なのである。深淵の前に「おそれとおのき」を抱きながら、信仰によって飛び越えていくことが求められる。しかし、この信仰の飛躍はその者だけのものであるがゆえに、普遍化することができず、したがって誰にも語ることはできない。そのようなアブラハムの物語を、「沈黙のヨハネス」という偽名著者に論じさせているところに、逆説的とも言えるキルケゴールのもう一つの深い意図を読むことができるのである。